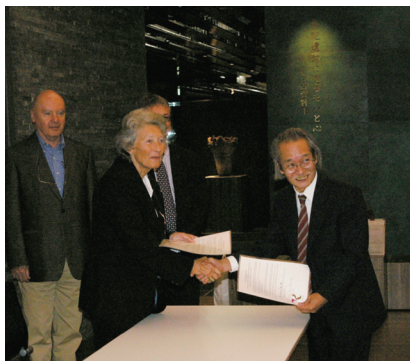


國學院大學 研究開発推進機構 機構ニュース

Vol.3 No.2
発行人 阪本 是丸
編集人 松本 久史
〒150-8440 東京都渋谷区東
4丁目10番28号
電話 (03) 5466-0162
FAX (03) 5466-9237

平成二十一年度に締結された研究協定について



セインズベリー日本藝術研究所との
研究協定調印の様子

研究開発推進機構は平成二十一年度に三件の研究協定を締結した。以下にその概要について述べる。

「島根県教育委員会と國學院大學研究開発推進機構との研究協力に関する協定」

島根県教育委員会と國學院大學研究開発推進機構は、平成二十一年四月一日付で「國學院大學研究開発推進機構と島根県教育委員会との研究協力に関する協定」を締結した。

本学における出雲研究には長年にわたる研究の蓄積があり、本協定はその研究成果を踏まえて出雲にお

る地域研究とその成果発信のための基盤を整備するものである。また、研究協定の締結により、研究活動に伴う様々な側面に関して島根県教育委員会の全面的な協力を得ることが可能となりその成果も大きく期待できる。

本年度はこれに基づいて、学術資料館研究事業の「琴引山に関する学術調査」、伝統文化リサーチセンター研究事業の「飯石神社の祭祀遺跡・遺物調査」を実施し成果を上げている。

「フランス共和国コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所と日本國學院大學研究開発推進機構との間の資料利用に関する覚書」

仏国コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所と研究開発推進機構は平成二十一年六月二十六日付で「フランス共和国コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所と日本國學院大學研究開発推進機構との間の資料利用に関する覚書」を締結した。

本協定は、文部科学省21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」等の事業

目次

- ◆平成二十一年度に締結された研究協定について……………1
- ◆博物館学教育情報センターと「高度博物館学教育プログラム」……………2
- ◆公開学術講演会「近代日本の国家形成と学知の意義」
(京都大学人文科学研究所教授 山室信一)……………4
- ◆国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」……………5
- ◆第三十五回 日本文化を知る講座「近代日本快人伝」……………7
- ◆研究開発推進センター研究事業
 - 「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」活動報告……………9
 - 平成二十一年度伝統文化リサーチセンター活動報告……………10
 - 考古学資料館収蔵資料にかかる基礎的整理について……………12
 - 平成二十一年度 研究開発推進機構事業計画及び人事一覧……………13
 - 彙報……………14
 - 資料紹介「二重口縁壺」……………16

において、千々和到(本学教授)を中心とする調査団がフランス側の松崎碩子氏らの協力で当研究所所蔵のベルナール・フランク氏旧蔵お札コレクション資料の調査を実施してきたことを受けたものであり、同資料の円滑な利用及び学術研究の発展を目的としている。本協定によって相互関係の一層の深化が望まれる。

「セインズベリー日本藝術研究所と國學院大學研究開発推進機構との研究協力に関する協定」

英国セインズベリー日本藝術研究所と國學院大學研究開発推進機構は、平成二十一年七月六日付で「セインズベリー日本藝術研究所と國學院大學研究開発推進機構との間の覚

書」を締結した。本学と当該研究所は、主に考古学部門に関する人員の交流があり、本協定では、それを踏まえて更に日本文化全般を対象とした共同研究の推進や、研究の学際化、ならびに研究成果の国際発信を行うための基盤を整備するものである。現在のところ、伝統文化リサーチセンター研究事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」「祭祀遺跡に見るモノと心」研究グループ(文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業)が英国へ赴いてワークショップ「The Archaeology of Jomon Ritual and Religion」を開催し、研究成果を発表すると同時に現地の研究者と交流するなど、積極的な活動を行っている。

博物館学教育研究情報センターと「高度博物館学教育プログラム」

伊藤 慎 二

國學院大學の博物館学は、開講五十一年目にあたる昨年大きな転機を迎えた。二〇〇九年九月より、文部科学省が進める「組織的な大学院教育改革推進プログラム」に、本学の「高度博物館学教育プログラム」(取組実施担当者代表・青木豊教授)が採択されたのである。二〇〇九年二月に博物館法施行規則改正により、大学学芸員資格過程において修得すべき科目と単位数が引き上げられたことで、今回のプログラムの価値は時機を得て非常に大きなものがある。

「高度博物館学教育プログラム」の目的は、博物館学に関する大学教育に携わることができる研究者教育者、ならびに高度な博物館学の知識・技能を有する上級学芸員の養成である。

この度、研究開発推進機構研究開発推進センター内に新たに設けられた博物館学教育研究情報センターは、「高度博物館学教育プログラム」を円滑に実施するため、取組実施担当者を補佐して実務拠点の役割を果たすセンターとしての位置づけが与えられている。海外博物館との共同調査・インターシッピング、本学とかわりの深い神社博物館における研究・実習や、

学校と連携し小学校などに付設された博物館・資料館で地域文化資源の「保存と活用・展示」を実践する専門・特殊実習授業実施などがその具体的な課題になっている。

博物館学教育研究情報センターは、発足以来、日本国内では長野県下高井郡木島平村・熊本県球磨郡水上村、国外では大韓民国釜山広域市・中華人民共和国陝西省西安市などでの事前協議・下見調査や、共同事業実施先の外国人研究

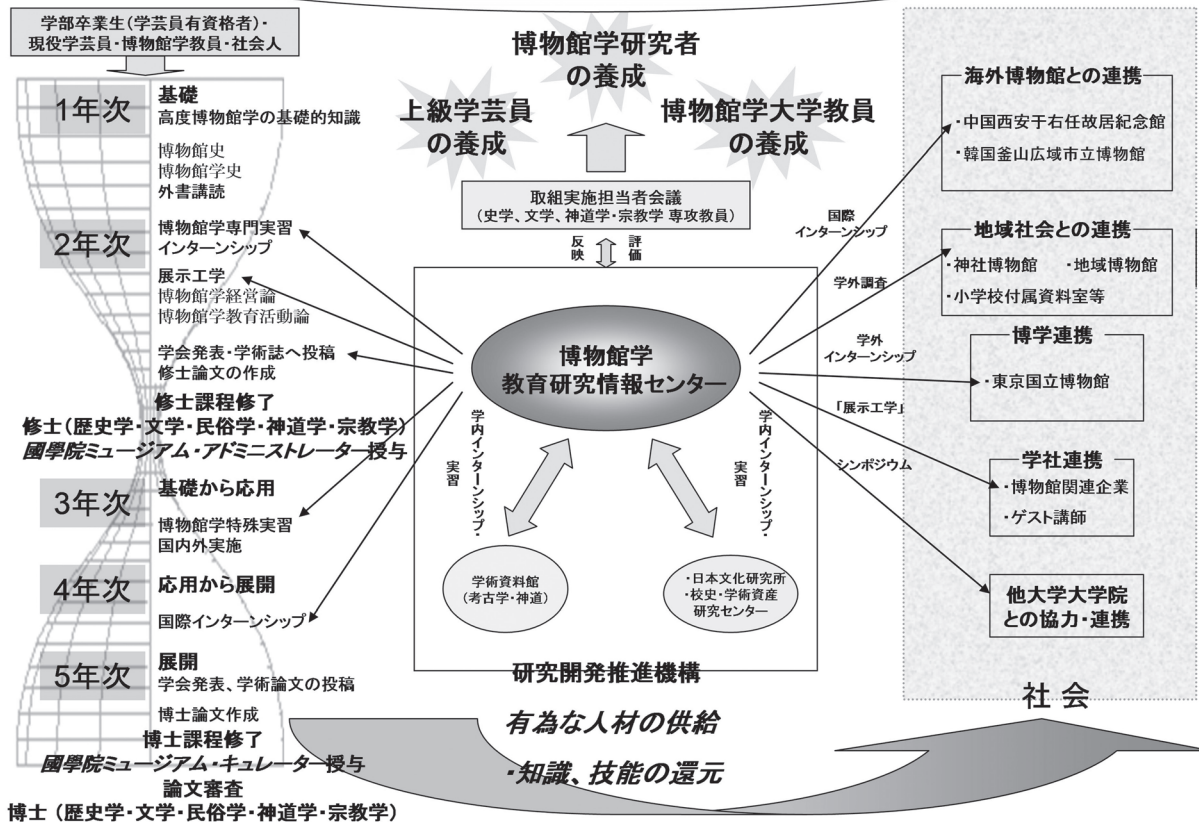
長野県木島平村における事前協議



長野県木島平村における事前協議

高度博物館学教育プログラム

体系的な知識と技能を備えた博物館学研究者と上級学芸員の養成



者を招聘しての特別講義実施など多様な活動を実施している。

二〇〇九年十月には、長野県木島平村を訪れ、木島平村小学校校長の樋口和雄氏からご教示を賜りながら、木島平小学校所蔵文化財の整理を通じた学校博物館構想にご協力するかたちで次年度以降実施予定の博物館学専門・特殊実習の事前協議を行った。木島平村では、村内小中学校の統合に向けて、それまで各学校が所蔵していた民俗資料を中心とする文化財を、農協倉庫を再利用して現在一括収蔵している。来年度以降の専門・特殊実習では、これらの整理・分類・記録作業を行い、最終的には統合後の小中学校における資料展示に成果を反映させて頂く予定である。これに関連して、樋口校長からは、資料保管状況の詳細について逐一詳細なご教示があり、さらに各施設の現状、村内主要関連文化財、専門・特殊実習実施時の宿泊施設・生活環境など非常に多岐にわたる有益なご助言をいただいた。

域市立博物館長楊孟準氏・釜山広域市立博物館学芸研究室長白承玉氏と、今後の共同事業実施について詳細に意見交換した結果、来年度からのインターンシップ実施とその受け入れについて快諾が得られ、本学大学院生の滞在生活環境に關しても各種のご配慮と懇切な助言をいただいた。本年一月十一日には、鈴木靖民大学院委員長と楊孟準館長との間で、今後の共同研究教育交流事業実施に關する合意書も取り交わすことができた。



韓国釜山広域市立博物館との合意覚書取交し



外国人研究者による本学での特別講義

館館長の于大方氏と事前協議を行い、今後の全面的なご協力を快諾して頂いた。西安于右任故居紀念館は、中国清朝末期〜中華民国期を代表する書家・文化人・政治家である于右任に關する資料を、その旧住宅を復元する形で収蔵・展示公開した博物館である。現代中国では数少ない私設博物館として、政府・地元自治体の支援も受けて本年開館した。ちなみに、今回の本学の事業に關しては、地元でも大変広く関心を集め、西安博物院院長・中国人民政治協商會議西安市委員会副主席の向徳氏らとも面会し、西安市文化行政部門からも今後のご協力をお約束頂き、また地域の有力紙「西安晚報」で

も今回の訪問に關して詳しく報道された。

さらに、二〇〇九年十二月には、熊本県水上村市房山神宮一宮神社を訪れ、同神宮禰宜尾形立氏と同権禰宜尾形聖多氏や市房山神宮里宮宮司の工藤駿介氏のご教示を賜りながら事前協議を実施し、一宮神社における博物館学専門・特殊実習実施の受入れについて快くご了解を頂くことができた。水上村は、九州を代表する清流球磨川の最上流部に位置し、宮崎県・鹿児島県との県境に面している。そしてその球磨川源流部を眼下に県境を挟んでそびえる霊峰市房山を神体として、市房山神宮は古代・中世より多数の崇敬者を集めてきた。同神宮は、その関連文化財を数多く所蔵しているが、未調査の資料も多く、将来的な保存展示施設の整備も課題になっていた。そこで、今回の実習では、こうした資料を対象に実施させて頂く予定である。

二〇一〇年一月には、連合王国ロンドン市大英博物館を訪問して今後のご協力をお願いし、一連の学外共同事業実施先との事前協議・下見調査をすべて円滑に終え、いよいよ新年度から「高度博物館学教育プログラム」の中心事業が本格的に開始される。

公開学術講演会「近代日本の国家形成と学知の意義」

京都大学人文科学研究所教授 山室 信一



國學院大學では、創立一二〇周年記念事業として平成十四年二月に着手された渋谷キャンパス再開発が、昨年九月の三号館竣工をもって完成を迎えた。今回の公開学術講演会は、その完成記念事業の一環であり、京都大学人文科学研究所の山室信一教授を招き、「近代日本の国家形成と学知の意義」と題して十月十日(土)に開催された。

本講演では、学術と技術を合わせた国学の「学知」(国学知)が有する、王政復古という歴史的邂逅(固有化)と文明開化などの空間的波及(平準化)の相反するベクトルをもって進んだ近代日本の国家形成ならびに国民形成における意義について論じられた。

文明国標準主義・泰西主義に基づく当時の思潮における国学のあり方は、草莽の国学として国民レヴェルに広く浸透したものの、明治啓蒙主義から固陋性が批判され、その学問の体系も実証主義・科学主義を受けて専門分科したことにより総体性を失っていった。しかし、そもそも国学が全国に普及したのは実学的な側面を有していたからであり、こうした知識と技術を合わせもった国学知が有する近代日本の国家形成における機能や意義を具体的に説明した。つまり国学知は、元老院の『旧典類纂』や司法省による『憲法志料』、宮内省における『大政紀要』及び『図書寮記録』の編纂を通じて、日本の国家制度のあり方における歴史的・伝統的正統性を担保する機能を果たし、また『憲法義解』・『皇室典範義解』や『古事類苑』の編纂のように、日本の国家として

の固有性を論証し、欧米との差違を認識するためのアイデンティティの確立において重要な意義を有したことを指摘した。

一方、国民形成においては、明治前期の大教宣布運動に代表される、日本の「国民」意識を内面化するための教化の学として国学知が機能したことや、その後政教分離・教学分離を背景に、「学問」としての国学知の制度化が進むことで創立された皇典講究所では、学術を修得する「文学」と、技術を身につける「作業」の二部をもって、総体としての国学のあり方(国学知)が示されたことを説いた。加えて学問の制度化における国学知が果たした重要な機能として、規範となる国語・国文の整備を唱えた津和野派の国学者・福羽美静による日本文典編纂の提議などを挙げた。

続いて、国学知の制度化を支えた人物として井上毅を取り上げ、井上が「外つ国の千くさの糸をかせきあけて大和錦におりなさましを」と詠み、世界の様々な材料を揃え、日本の国情や歴史に適合するものを検討・選択して国制や法律をつくっていくことで、和漢洋を一つにまとめた新しい学知の世界を構築しようとしたことを論じた。また、井上が国典の研究を国家形成や国民形成の基盤とし、特に国語を国家の独立と国民のアイデンティティを示す重要な指標と捉えたことを説明するとともに、こうした井上の考えは、現在では言語ナショナリズムと批判され

るが、明治日本の国民形成における言語のもつ意味合いは、今日考えられるよりもはるかに大きく、また井上に限らず、政治思想では敵対者であった福沢諭吉も、非西洋世界・非キリスト教世界における独自の文明国家としての日本の存在理由をいかに示すかについて追求したことを指摘した。

そして、国学知とは対抗学知、すなわち他者に対して自己を確立するための学問・考え方であり、それは他者を排斥するのではなく、他者を前提に自己を確立する自己省察・自己探求の学問・考え方であると説明した。最後に、今日のグローバルゼーションが、一方でローカリゼーションとして各々の固有性を要求している中、日本という歴史的空間の固有性の探求を自己の学知にとどめることなく、世界的に発信していく学知として構成することが二十一世紀における国学知の課題であり、その発信拠点として國學院大學が最も相応しく、かつ二十一世紀の国学知を新たな視点で開発していくことが期待されると語った。

なお、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」の研究成果の公開であり、本講演会とも関連した記念展示会「近代日本国家形成と國學院」が、國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館・國學院大學図書館において同時開催された(展示期間は十月一日〜二十八日)。

(文責・齊藤智朗)

国際研究フォーラム

「映画の中の宗教文化」

去る九月二十日に國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の主催によって国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」が行われた。本フォーラムは、映画を宗教文化教育の教材の一つとしてとらえた場合に、そこについての問題点と可能性があるのかについて幅広く議論することを旨とするものであり、それぞれ五名ずつの発題者とレスポネントによる発題とコメントを受けて最後に総合討議を行うという形で進行された。以下発題順に簡単に内容を紹介する。



近藤 光博

第一発題者 近藤光博(日本女子大学) 「映画を教材にして比較宗教の理論的課題を明らかにする——ひとつの試みの報告」、レスポネント 富澤かな(東京大学)。

近藤は、まず宗教学という学問そのものが抱えている理論的課題、すなわち宗教と世俗の二分法において成立している「宗教」という言葉が、今日の状況にうまくあてはまっていないという問題をどのように乗り越えるかという問題意識について述べ、その展開において抽象的な問題に具体的なイメージを与えるために映画を用いているとして、実際にいくつかの映画を挙げてこれを説明した。

これを受けてレスポネントの富澤は、映画に含まれている虚と実をどのように切り分けるか、またドキュメンタリーの虚と実についても、どのように取り扱うことができるのかといった問題提起を行った。

第二発題者 中町信孝(甲南大学) 「アラブ歴史映画に見るイスラムとナシヨナリズム」、レスポネント 白杵陽(日本女子大学)。

中町はまず教材としての映画を三つのレベルから捉えることができるとし、第一に映画を歴史の再



現として捉えるある意味単純なレベルがあり、第二にそこに作り手の脚色があることを指摘するレベルがあるとした。しかし、この第二のレベルに関して逆に教師の恣意的な読み込みを避けるためにも、第三のレベルとしてその映画が成立している社会・時代状況に目を向ける必要があると述べた。

具体的な例として幾つかのアラブ歴史映画を取り上げ、例えばハリウッド映画とエジプト映画では同じ出来事が異なる形で描かれていることについて説明し、またそこに監督と観客が共有している前提を見て取ることができることを指摘した。

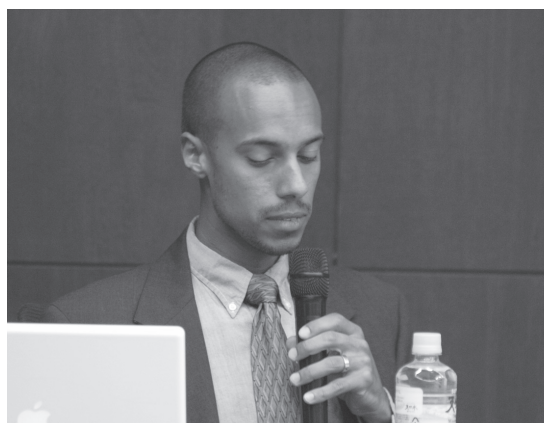
これを受けてレスポネントの白杵は、中町が取り上げたユーセフ・シャヒーンという映画監督の宗教的背景について補足した上

で、日本の学生があらかじめ持っているイスラームイメージを投影する形で映画を誤読してしまう可能性があることを、過去の授業の例に触れながら指摘した。

第三発題者 ジョリオン・トーマス Jolyon Thomas (米・プリンストン大学) 「西洋から見た日本映画の宗教性」、レスポネント 櫻井義秀(北海道大学)。

ジョリオンは、映画と宗教という問題が近年学問的に研究されるようになってきたことに触れながら、しかしその方法についてはまだ十分に検討されていないとし、受容理論やカルチュラル・スタディーズの手法を取り入れて観衆の受容の仕方に向けての重要性を強調した。

また一口に映画と宗教といっても、単に背景、あるいは美的・表



面的な記号としてのみ宗教的な事物を用いている映画もあれば、逆に宗教団体などによって明らかに教化的な目的をもってつくられた映画もあるとし、また結果として宗教的に受容されるような映画もあると述べた。そしてこの最後の種類の映画とその受容についての研究にはやはり観衆の側に目を向ける必要性があると指摘した。

これを受けてレスポンドの櫻井は、観衆の受容に着目することの重要性を再確認した上で、なお作り手側の意図を含めた映画の脈絡や背景などもやはり押さえておく必要があることを、ドキュメンタリーを用いた授業の例に触れながら述べた。

第四発題者 ジャンーミシェル・ビュテル Jean-Michel Butel (仏・国立東洋言語文化大学) 「アニメはどんな宗教を語ってくれるかー『平成狸合戦ぽんぽこ』に見る日常宗教」、レスポンド 西村明(鹿児島大学)。

ビュテルは、フランスで現代日本文化入門という授業を行う際に、高畑勲監督による『平成狸合戦ぽんぽこ』というアニメーション作品を用いていることについて述べた。

これは一つには日本のゲームや漫画、アニメーションに関心を持つフランスの若い学生たちに対してより受け入れられやすい形で日本文化への入り口を提供するという戦略であるが、他方で『ぽんぽ



こ』に多くの宗教的要素が見られることにもよる。もちろん『ぽんぽこ』は直接宗教を取り扱う映画ではないが、逆に非一貫的に提示されている宗教的要素が、かえって日本文化のなかに組み込まれている諸々の宗教的要素をうまく表しているのではないかと論じた。

また、映画の中のひとつのクライマックスに狸の変身による妖怪の大パレードがあり、これを見た学生たちはそこに強いエキゾティズムを感じるという。しかし、映画の中の登場人物たちは必ずしもその妖怪たちを宗教的には受け取っていないということが決定的に重要であるとビュテルは指摘し、日本人をエキゾティズムにおいて捉えることを再び相対化することの必要性を述べ、またそうしたメッセージをも発している点におい

て『ぽんぽこ』がすぐれた教材足り得るとした。

これを受けてレスポンドの西村は、映画と宗教を考える際に、単に映画の中に宗教文化的な要素を見出すだけでなく、宗教をもって映画を見るという視点、あるいは方法が重要なのではないかと指摘した。また例えば『ぽんぽこ』を一つの焦点として日本とフランスの学生がお互いの捉え方について論じ合うことで、更に認識を深めることができるのではないかとという見通しについて述べた。

第五報告者 グレゴリー・ワトキンス Gregory Watkins (米・スタンフォード大学) 「宗教と映画を教える際の新しい傾向」、レスポンド 山中弘(筑波大学)。

ワトキンスは、映画と宗教について実際にどのような授業を行っているのかについて、小集団による開けた議論を中心に行っていることや、またそれを通じて学生達に議論のための共通の土台を作っていくことといった手法的なことについて触れ、また取り上げる教材について、古典的な宗教理論を含む課題図書と様々な傑作映画を組み合わせていることなどを詳しく説明した。

そして授業を通じて学生達がそもそも映画とは何か、宗教とは何かといった根本的な問題について思索を深めること、また映画という独自の性格を持つメディアにおいて、そこにはある種の宗教表現

やあるいは宗教体験が立ち現れてくることについて考えるようになることについて述べた。

これを受けてレスポンドの山中は、ワトキンスの提示した授業がある種の範型となり得るとし、そこで映画が単に宗教理解のための道具として用いられているのではないことが重要であると指摘した。

その後フロアとの活発な議論が交わされ、映画が宗教文化教育において大きな意味を持つということについて参加者の共通理解が深められ、これまで必ずしも十分に議論されてこなかった面がある映画と宗教という問題について今後より議論が展開させられていく可能性を感じさせるフォーラムとなった。

(文責・星野靖二)



第三十五回 日本文化を知る講座 「近代日本快人伝―アジアとの掛け橋を目指した人びと」

第三十五回「日本文化を知る講座」は、平成二十一年九月二十六日、十月三日、十月十七日、十月二十四日の計四回、それぞれ十三時三〇分より十五時三〇分まで、総合主題「近代日本快人伝―アジアとの掛け橋を目指した人びと」との掛け橋を主催、渋谷区教育委員会共催により開かれた。

西洋列強の進出により旧来の国内外秩序が破壊され、新たな規範の創出を余儀なくされた十九世紀後半から二十世紀初頭のアジア諸国。その中でいち早く変革・再統合と西洋化の道を選択し、辛くも亡国の危機を免れた日本は、幾度かの戦争を経て、自らも多民族帝国の支配者として勢力圏を築くに至った。

当時から今日まで、かかる近代日本の歩みは「日本帝国の侵略」対「アジア民衆の抵抗」或いは逆の「西洋列強の侵略」対「日本のアジア解放」であれ、いずれにせよ「侵略者／抵抗者」という二項対立のなかで語られがちであった。だが、この単純な構図では捉え切れない、歴史の皮肉と重みも認識されねばならない。

この問題意識から今回の講座は、対抗と融和の構図のただ中で、日本とアジアそして世界との「架け

橋」たることをめざした思想家・哲学者・運動家たちの人物像と思想を描き出そう、と企画された。この人々の全てが架け橋となり得たか、「快人」と呼べるか、は疑問ではある。しかし、彼らの思想と活動の可能性と限界、彼らが依る辺とした近代の日本を知ることが、また世界の一員としての日本の、今日以降の可能性の模索にもつながるであろう。

親しみやすいばかりでもない主題ながら、渋谷区教育委員会のご協力もあり、各回とも六十〜八十名ほどの聴講者が参加、まずまずの評価を頂いた。また学外講師の講演はみな学術的価値が高く、今後の共同研究企画等への発展を期待する声もあった。以下に各回の講演概要を記する。

● 第一回

「海外神社」の思想と展開

―小笠原省三の軌跡

菅 浩二

海外神社とは日本帝国の植民地と外国の神社を包括する用語で、小笠原省三『海外の神社』以後に定着した。植民地の神社は日本敗戦後に廃滅したが、小笠原は戦後の『海外神社史上巻』で尚も絶望せず、未来の国際情勢の中で、海

外神社が世界に展開する可能性に熱く期待している。

小笠原は青森県の神社に生まれ國學院大學に学んだが、神職ではなく歴史作家を志し、当初ある程度成功した。だが大正後期には右翼団体の幹部となる。当時の公式解釈とは異質な神社観を説く程の歴史的素養と、ロシア革命への対抗意識、朝鮮民族への親近感など、多民族帝国形成過程の諸問題意識が結合し、朝鮮神宮祭神論争を契機に、彼は急速に海外神社運動にのめりこむ。更に、昭和三〜四年のブラジルの日系入植地訪問と世界一周を経て、彼は日本建國神話に基づく「拓地植民」の理想を、神社の世界宗教的展開に求めるに至る。彼は、海外神社で土着文化を取り入れつつ国魂神を祀り、先住者への敬意を示すことが、日本民族が求めるべき人類の調和への道だと説き、特に満洲事変頃からの十数年、活発に活動する。

しかし海外神職養成運動の失敗、昭和十五年の北京神社問題に見られるように、小笠原の運動は、自らも一役を担った帝国の膨張の中で無力化していく。その一因は、宗教的使命感を帯びた彼独特の海外神社論が、他方では神社と記念碑を同一視する当時の神社非宗教論とも結びついていった点にある。こうした限界を踏まえるべきものの、神社の未来像を考える上で、小笠原の軌跡は様々な注目すべき要素を含んでいる。

● 第二回

「満洲王」の夢

―神道家・葦津耕次郎の生涯

西矢 貴文

葦津耕次郎は、同じく神道思想家の葦津珍彦の父としても知られる。耕次郎の父磯夫やその出自の大神家など、宮崎宮神職に連なる葦津家の背景自体に、神道者の情念が満ちている。だが少年期の彼は実業家の伯父大三輪長兵衛の影響下に大陸経綸の志を抱いて成長したが、神を拝することもなかった。その彼が父の看病と神秘体験を契機に敬神の念へと回心、神職に就く。やがて日露戦争に臨み戦勝祈願祭を実施、アジアへの志と神道人としての信仰の確立に至る。日露戦後の韓国の神社創建運動などを経て彼は神職を離れ、頭山満をして「日本一の悪口屋」と呼ばしめる、政官軍の要人に直接働き



かける神道運動家となる。彼は韓国併合前に伊藤博文統監に、また朝鮮神宮祭神論争の際に齋藤実総督に、敬神の点から日韓の融和を直言した。

耕次郎は筥崎宮の由緒たる八幡神の「敵国降伏」の神威を、世界平和に叛く者が、おのずから我が皇化を慕って降伏し来たる、と解した。彼には「韓国併合に反対した神道人」との評価もあり、実際に武断的朝鮮統治について、その指揮者明石元二郎に対し「大失態」と難じたほか批判を繰り返している。しかし一方で彼は「満洲を日本の城壁に」との「満洲王」の夢からも離れていなかった。親切を旨とした彼は、自らを整えて他者の幸福に貢献することを目指し、そのために日本が自国のあるべき祭祀と政治の姿を確立する必要がある、と考え、生涯をその運動に投じた。その問題意識は、今日の我々にも無縁ではない。

●第三回

「東洋哲学」の創造

—西周・中江兆民・井上円了・

梁啓超におけるカント

ミヒヤエル・ブルチャール

十八世紀ドイツの哲学者イマヌエル・カントの思想は、明治期以降の日本で、また日本を経て中国など東アジアでどのように受容されたか。

清末民初の思想家梁啓超が、哲学館(現東洋大学)の創立者井上

円了が「四聖」の一人としてカントを祭った事を記している。今も東京・中野区の哲学堂公園に見られる通りだが、こうした場合カントは、高潔な人格を尊崇する対象とされており、その扱いは儒教における聖人祭祀に類似している。

中江兆民は「我日本古より今に至る迄哲学無し」と述べ、三宅雪嶺は「西洋哲学を翻復し来て東洋哲学の体貌を照らすべし」と説いた。周知の通り哲学の語はphilosophyを、西周が「希哲の学」即ち「哲学ト訳シ東州ノ儒学ニ分ツ」としたものだ。日本における哲学は、儒学や宗教と関わりつつ独自の範囲を持つ学問として成立し、単なる西洋思想の輸入以上の「東洋哲学」を志向したが、或る方面では、国家主義もその発展の重要な要素となった。カントの定言命法の理解をめぐり、晩年の井上



哲次郎が「神ながらの道」と同じだと弁じたことは象徴的である。また、例えばsubjectの訳として現れた「主観」「主体」「臣民」などの語について、帝国憲法や教育勅語をめぐり解釈・解説の中でその用法の変遷を具体的に追うことにより、近代日本の国家観や、漢字を媒介に東アジア諸国にもたらしたその影響も、より深く知ることができらるだろう。

●第四回

「アジア主義」を問い直す

—R・B・ボースと新宿・中村屋

中島 岳志

私はヒンディ語を学び、竹内好、橋川文三などの著作に導かれ、他方で大川周明を軸に「思想的」アジア主義や宗教の問題を考える中で、インド独立革命家ラース・ビハリール・ボースの生涯に出会った。ボースは英国支配下ベンガルの農村に生まれ、地下活動に参加、ハーディング総督爆殺未遂事件により逃亡生活に入った。やがて彼は日本に亡命するが、日英同盟下に国外退去命令を受け、「心情的」アジア主義の領袖頭山満の画策により中村屋に匿われる。潜伏生活の間に中村屋の娘相馬俊子と結婚、一男一女をもうけ、日本を舞台にインド独立言論活動を再開するが、日本に帰化した後、妻を病で失う。だが相馬家との絆は益々深まり、中村屋は彼直伝のインドカーリーを発売。この「恋と革命の味」には、



植民地支配の桎梏に苦しむ祖国への思いが込められていた。

活発な活動の陰で、ボースは引き裂かれ苦悩していた。インド独立・アジア解放には日本の力を頼まねばならない、しかしその日本は他方で、西洋列強に倣う帝国支配者として東アジアに君臨している。彼は同様に苦悩する朝鮮人運動家秦学文と、涙ながらに酒を酌み交わした。やがて「大東亜」戦争が勃発。彼は病に倒れ、ナチスドイツに庇護されていたチャンドラ・ボースに、日本の対インド工作指導者の地位を譲った後、祖国の地を踏むことなく、また長男の戦死、日本敗戦も、そしてインド独立も見ることなく、東京で病死した。近代日本とアジアという難問と格闘し続けたこのインド人の壮絶な生涯は、今も我々に多くの課題を投げかけている。

(文責・菅浩二)

研究開発推進センター 研究事業 「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」活動報告

研究開発推進センター ポスドク研究員 星野光樹

本センターの研究事業「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」では、平成十八年度「慰霊と招魂」研究会発足以来、靖国神社に代表される戦没者に対する神道的な慰霊・祭祀にとどまらず、広く「人を神として祀る」信仰と慰霊に関する研究基盤を構築するための研究活動を行ってきた。

本年度は、これまでの事業目的を踏まえ、研究会・シンポジウム、ならびに研究調査を以下のとおり実施した。

①研究会・シンポジウム

本年度は招魂社祭祀の淵源と展開、および近代以降における軍や地域共同体、仏教その他教団における慰霊の実態を明らかにすることを目的として、中山郁「戦争体験を書くこと、語ることと慰霊―あるビルマ戦線生還者の事例から―」(平成二十一年四月二十五日)、粟津賢太「媒介される記憶―沖繩における遺骨収集の展開を中心に―」(五月二十三日)、関敦啓「木曾御嶽信仰における霊神の存在形態―祭祀・供養―」(八月一日)、津田勉「招魂社の発生とその信仰思想の系譜―幕末長州藩を起点として―」・村岡達也「近世以降長州

藩における宗教政策からみる慰霊・顕彰祭祀の系譜」(八月二十一日)、喜多村理子「語りと記録にみる庶民の徴兵除け感情」(十月三十日)、坂井久能「管内神社等の創建とその機能」(十一月二十八日)の、六回にわたる研究会を開催した。前年度より近代における慰霊や戦没者祭祀のあり方を、「招魂の系譜」として位置づけることが研究計画として策定されたが、これをうけて、津田勉氏(本センター共同研究員)による発表「招魂社の発生とその信仰思想の系譜―幕末長州



第26回研究会
8月21日津田勉氏発表

藩を起点として―」では、長州藩において発生した招魂社が靖国神社へと展開していく過程について、信仰・思想的な観点から論じる報告がなされた。招魂社の濫觴とされる桜山招魂社の創建に関わった白石正一郎や、青山上総(のちの靖国神社初代宮司)等は、国学を学んだことにより、亡くなった人間の霊が直ちに「神霊」となるといふ古代の伝統的神霊信仰を持っていたことを指摘し、招魂社・靖国神社の祭祀は、そうした神霊信仰が起点にあると結論づけた。

なお、平成二十二年二月十三日(土)には、本年度の研究会を総括するうえで、シンポジウム「霊魂・慰霊・顕彰の民俗」を開催し、近代日本、とりわけ昭和期から現代にいたる時期に焦点を当てつつ、地域社会や遺族、戦友などが行う戦没者祭祀・慰霊のあり方について、家庭での慰霊や神道・仏教的な祭祀、供養儀礼、さらに海外慰霊巡拝など、具体的な事例に基づいて検討を行った。

②出張調査

本研究事業は、戦没者における慰霊・追悼のあり方について、幕末期以降の英霊祭祀、とりわけ長州藩における招魂社祭祀の実態と霊魂観の歴史的展開を検討するうえで、これまでに山口県文書館収蔵の招魂社関連資料の調査・蒐集作業を行ってきた。

本年度はその第三回目として、

本センターポスドク研究員である星野光樹と宮本蒼士により、平成二十一年十二月十七日(木)から二十日(日)にかけて、山口県文書館での招魂社関係資料の調査を実施した。

今回の調査では、明治二十年代から三十年代にかけての行政文書を中心に閲覧し、このうち、『招魂社事務』(明治二十一年〜二十四年、二十六年〜三十年)、『招魂社一件』(明治二十五年・三十一年)、『招魂社一件録』(明治二十四年)、『招魂社』(明治三十二年)、『招魂社墳墓』(明治三十三年)などについては、デジタルカメラの撮影による蒐集作業を行った。行政文書は、一冊ごとの目次部分のほか、合祀関係文書、神職の任免に関わる文書を中心として、祭祀の担い手と祭神の合祀状況を確認し得る部分をそれぞれ撮影した。これら資料に基づき、今後は日清戦争を画期として、招魂社の実態がどのように変化するか、その分析を進めていく必要がある。

なお、調査日程のうち、十八日は山口県護国神社に津田勉氏を訪ね、氏が現在すすめている白石正一郎に関する資料の分析や、長州藩における招魂社および神葬祭に関する研究の報告をうけ、意見の交換を行った。

平成二十一年度伝統文化リサーチセンター活動報告

■全グループ共同

本年は、五ヶ年のオープン・リサーチ・センター事業が折り返しに差し掛かったこともあり、七月に中間成果公開シンポジウムを実施した。そこでは、杉山林継センター長による講演の後、若手研究者を中心に発表を行い、西岡和彦准教授と、立正大学の時枝務准教授からコメントを頂戴している。本学の学術資産を活用しつつ、「國學院」らしい学問の創造が期待されるよう。

また、六月の企画展では、「祭祀遺跡に見るモノと心」・「神社祭祀に見るモノと心」・「國學院の学術資産に見るモノと心」の各研究グループが個別の成果を公開したが、十一月の企画展「まつりのそなえ」では、三グループ共同の展示を行った。先史時代から今日に至る神饌の実態と、その研究に関する史料を展示するものであり、五世紀に形成された幣帛の歴史を通観する展示内容については、図録の刊行や、公開講座の実施を通して、一層の普及を期したところである。

なお、本来であれば各グループの成果についても詳述すべきだが、紙幅の関係もあり、以下に実施済み事業の一覧を掲げるに止めた。詳細は、伝統文化リサーチセンターのニューズレター『伝統文化のモノと心』を参照されたい。

●中間成果公開シンポジウム「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」(七月二十五日)

講演 杉山林継「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」・発表 内川隆志「ORC「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト活動・成果報告」・加藤元康「祭祀考古学の方法論的展開―「祭祀遺跡に見るモノと心」グループの活動を通して―」・茂木貞純「神社祭祀に見るモノと心」グループ研究概要」・筒井裕一「現代の曳きもの祭祀の地域的特徴―兵庫県・埼玉県に注目して―」・

武田秀章「國學院の学術資産に見るモノと心」研究プロジェクトの概要」・大東敬明「戦前の國學院大学における研究発信の一端―民俗芸能の実績と資料展示会を中心に―」・コメント 西岡和彦・時枝務

●企画展「祭祀遺跡・神社祭祀・國學院の学術資産Ⅱ」(六月十一日～七月十八日)、企画展「まつりのそなえ―御食たてまつるもの―」(十一月二日～十二月十二日)

●公開講座「そなえを問う」

第一回 加瀬直弥「古い神饌を考えること」(十一月七日)、第二回 加藤里美「考古学からそなえを問う」(十一月二十一日)、第三回 遠藤潤「近代の特殊神事と神饌―神社行政・神道史学・民俗学―」(十二月十二日)

●三グループ合同横断研究会

第四回(発表) 加藤元康「祭祀研究としての考古学」・池谷浩一「神社文化財について」・渡邊卓「三矢重松と武田祐吉との関わり―武田来簡を中心に―」(二月二十五日)、第五回(展示解説) 加藤元康・島田潔・斎藤しおり(六月三日)、第六回(展示解説) 齊藤智朗(十月二十一日)、第七回(展示解説) 加藤里美・加瀬直弥・遠藤潤(一月二十五日)

■祭祀遺跡に見るモノと心

●研究フォーラム「環状列石をめぐるマツリと景観」(六月二十日、二十一日)

講演 杉山林継「祭祀と景観」・小林達雄「自然の社会化と縄文ランドスケープ」・発表 阿部昭典「東北部における『第二の道具』の多様化」・中村大「祭祀考古学研究と解釈」・加藤元康「環状列石と遺跡群の空間的關係」・國木田大「東日本におけるトチノキ利用の変遷年代と環境変動」・石井匠「縄文土器研究の新視角」・谷口康浩「縄文時代堅穴住居にみる屋内空間のシンボリズム」・佐々木雅裕「三内丸山遺跡における環状配石墓の造営と祭祀・儀礼」・高橋毅「北海道西部の環状列石」・児玉大成「青森県における環状列石と祭祀・儀礼」・榎本剛治「米代川流域における環状列石と祭祀・儀礼」・太田原潤「原初的の二至二分認識の萌芽と展開」・討論司会 小林青樹

●調査

第一回「東北地方北部出張調査(青森県埋蔵文化財調査センター・平内町歴史民俗資料館・平内町内の遺跡)」阿部昭典・加藤元康(五月十五日～十六日)、第二回「東北地方北部出張調査(青森市教育委員会・青森県埋蔵文化財調査センター・滝沢村教育委員会・岩手県埋蔵文化財センター・秋田県埋蔵文化財センター・北秋田市教育委員会・鹿角市教育委員会)」杉山林継・加藤里美・阿部昭典・加藤元康・朝倉一貴(七月二十五日～三十一日)

第一回「伊豆地方出張調査(三宅村教育委員会、三宅村立図書館、島内の積石塚遺跡・転石散布地・和鏡出土伝世地・主要神社仏閣)」吉田恵二・内川隆志・深澤太郎・石井匠・佐藤周平・上田翼(八月二十六日～三十日)、第二回「伊豆地方出張調査(下田市白濱神社・下田市教育委員会・下市内の遺跡)」内川隆志・深澤太郎・石井匠・新原佑典

第一回「出雲地域出張調査(島根県立古代出雲歴史博物館・飯石神社・由來八幡宮・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター)」加藤里美・新原佑典・佐藤周平(六月十一日～十三日)、第二回「出雲地域出張調査(島根県立古代出雲歴史博物館・飯石神社・由來八幡宮・琴弾山神社)」杉山林継・加藤元康・平野哲也(九月十八日～二十四日)

第一回「韓国出張調査(釜山大学校博物館・慶北大学校博物館・

聖林文化財研究院・高麗大学日本学
研究センター・高麗大学校博物館
・中央文化財研究院・国立中央
博物館・漢陽大学校博物館・韓国
考古環境研究所・文化財庁・国立
夫餘博物館」高慶秀(七月二十日
～二十六日)

第一回「青森県平内町槻ノ木遺
跡出土品に関する調査(国立歴史
民俗博物館)」阿部昭典・加藤元康
(七月二十三日)

●定例研究会

第十三回 中村大「祭祀考古学研
究と解釈」・加藤元康「環状列石と
遺跡群の空間的關係(一)」(六月
四日)、第十四回 阿部昭典「東北
北部における「第二の道具」の多
様化」・石井匠「縄文土器研究の新
視角」・加藤元康「環状列石と遺跡
群の空間的關係(二)」(六月十七日)

■神社祭祀に見るモノと心

●研究フォーラム「祭祀を彩る動物」
(七月十八日)

挨拶 茂木貞純・発表 茂木栄「祭
礼に登場する動物―特に狩猟儀礼
に焦点を当てて―」・茂木栄「祭祀
を彩る動物(祭祀映像の解説)」・
櫻井治男「動物変装の一齣―祭祀
に登場する動物の事例報告―」・牟
禮仁「動物と信仰に関する研究の
紹介」・島田潔「アンケート結果に
見る祭祀の中の動物たち」・司会
筒井裕

●調査

「滋賀県老杉神社の祭祀調査(老
杉神社)」筒井裕・新木直安(二月
十四日～十六日)、「日光の神社の

文化財調査(日光東照宮・日光二
荒山神社・栃木県立図書館)」茂
木貞純・池谷浩一・小島優子・横
山直正・後藤正明(二月十九日～
二十二日)、「兵庫県御形神社の祭
礼調査(御形神社)」島田潔(二月
二十八日～三月二日)、「群馬県一
之宮貫前神社の祭祀調査(一之宮
貫前神社)」筒井裕・鈴木聡子・伊
東裕介(三月十三日～十五日)、「石
川県波自加彌神社の祭祀調査(波
自加彌神社)」筒井裕・鈴木聡子・
伊東裕介(六月二十二日～二十四
日)、「日光東照宮の文化財(建造
物)調査(日光東照宮)」茂木貞
純・池谷浩一・山田岳晴・横山直
正(七月二十二日～二十四日)、「愛
媛県三島神社の祭祀調査(三島神
社)」島田潔・筒井裕・鈴木聡子・
伊東裕介・大畑孝子(十月十四日
～十七日)

●ワークショップ「正月飾り(きり
こ)製作教室」(十二月十二日)

司会 茂木貞純・講師・榎原久康
(宮城県塩竈市・稲荷神社宮司)・
展示解説 島田潔

●共催プログラム「自然環境と祭
り・芸能Ⅲ」(十一月十四日)【主催】

國學院大學環境教育研究プロジェク
ト・財団法人ポララ伝統文化振興財
団・【共催】社叢学会

講演 小島美子「神楽の基本的性
格と楽器編成」(日本民俗音楽学会
会長・国立歴史民俗博物館名誉教
授)・映像上映 國學院大學映像民
俗学研究室「各地の神楽―黒森神
楽・早池峰神楽・花祭・隠岐神楽・

佐陀神能・豊前神楽・高千穂神楽」
ポララ伝統文化振興財団「神々の
ふるさと・出雲神楽」・展示解説
島田潔

●國學院の学術資産に見るモノと心

●中間総括シンポジウム「近代人文
学の形成と皇典講究所・國學院の学
問」(七月十一日)

発表 大東敬明「宮地直一と神道
史学―神名帳研究を中心に―」・戸
浪 裕之「河野省三と神道学―「神
道教化(史)」研究を中心に―」・中
村耕作「大場磐雄と神道考古学」
・渡邊卓「武田祐吉と国文学―日本書
紀研究を中心に―」・齋藤しおり「折
口信夫と民俗学」・司会 齊藤智朗

シンポジウム 松本久史「近世国
学から近代人文学へ」・藤田大誠「皇
典講究所・國學院と近代人文学」
・コメント 大沼宜規(国立国会図書
館主題情報部司書)・島善高(早稲
田大学社会科学部教授)・林淳
(本学研究開発推進機構客員教授)・
藤潤

●第三回公開講座「國學院の古代研
究」(十月三日)【共催】北海道滝川
市・國學院大學北海道短期大学部

講演 遠藤潤「近世国学の古代研
究―平田篤胤を焦点として―」・中
村耕作「古代の心に迫る國學院の
考古学」・月岡道晴「折口信夫の
古代学―まれびと論を中心に―」
・秋元信英「明治二十一年、松本愛
重『国学』の一考察」・司会 武田
秀章・渡邊卓

●校史・学術資産研究会

第十一回 笹川勲「武田祐吉旧蔵
『古今和歌集』秋歌上について―
付、武田祐吉の学問と古典籍」・荒
木優也「西行「ねがはくは」詠の
享受―武田祐吉博士旧蔵『新古今
和歌集』大夫阿闍利本卷第八末歌
について―」(三月五日)、第十二
回 宮原一郎「江戸の文書社会―百
姓印形と証文―」(五月二十一
日)、第十三回 堀越祐一「古文書
の伝来について考える―政治史分
析の一手法として―」(六月二十四
日)

●定例研究会

第十三回「来年度の展示替えに
ついて」(一月二十八日)、第十四
回「中間総括シンポの発表構想」(四
月十五日)、第十五回「中間総括シ
ンポの発表構想」(六月十日(水))、
第十六回「中間総括シンポのプレ
発表」(七月一日)、第十七回「セ
ンター紀要の要旨」(九月十六日)

●調査

第一回「神宮文庫調査」・大東
敬明・渡邊卓(一月二十二日～
二十四日)・第二回「神宮文庫調
査」・大東敬明・戸浪裕之・渡邊
卓(十二月九日～十一日)

考古学資料館収蔵資料にかかる基礎的整理について

客員研究員 伊藤博司

國學院大學研究開発推進機構に属する考古学資料館の事業の一つとして収蔵資料の再整理・修復事業が位置づけられている。それは博物館資料の保存から教育普及等の多岐にわたる事業にかかわる最も基礎的かつ重要な仕事の一つでもある。

当資料館は設置から八十余年が経過し、約十萬点にも及ぶ資料が収蔵されているが、経年変化により再整理および再整理が不可欠となっていることから、中長期的な対応も必須であり、また、資料館資料の補完も重要課題の一つである。

平成二十一年度は、こうした理念と事業計画に基づき、膨大な既存資料の再整理とともに旧石器時代、縄文時代の石器を中心とした小松修治コレクションを國學院大學考古学資料館の寄贈資料とするため一連の基礎的な整理作業も実施した。

本コレクションは、主に昭和三十年代後半から昭和五十年代前半に小松修治氏(故人)が北海道、東北地方、中部地方および関東地方において独自に表面採集を実施し、石器を主として収集されたものである。表面採集遺物ながら湧別技法等の典型的な製作技法を

証明するに足る資料が数多く存在し、一次資料(実物資料)を主とする資料館の既存資料を補完できる価値を具備しているものと解される。しかし、出土遺跡名などが不明確、かつ、十年以上外気にさらされ粉塵や保護材(脱脂綿)が付着しており、クリーニング等の基礎的な整理が必要であった。

力量あるコレクターの収集した資料は、古今、地域を問わず優れた研究素材を提供してくれる場合があり、収集欲とも呼ばれる探究心から系統立って集められたものであればある程、その価値は高揚する。博物館人は、資料群の充実化を進めるためにも、こうした資料的価値を逸早く判断し、事務的手段も含めた知識を常に養っておく必要がある。

本コレクションについても、寄贈に伴う諸手続きや収蔵リストの整備に対応するため、資料の洗浄、ナンバリングと形態分類、さらに、小松氏の朋友の方々への聞き取り調査を実施し、氏の来歴や、コレクションの由緒を盛り込んだ基礎的な資料台帳を作成している。

整理された遺物は、関東地方と東北地方出土の縄文時代中期から晩期の深鉢形土器十三点、古墳

時代の小形壺、北海道地方出土遺物(石器)三八〇点、東北地方出土遺物(石製品・土製品)一四四〇点、長野県地方出土石器(石製品)九〇九点、関東地方出土石器八七点の総数約一、五〇〇点にのぼる。なお、各地方の石器群は、旧石器時代から縄文時代を主体とし、石質や形態に特徴がある。中でも、北海道常呂郡置戸町安住遺跡および紋別郡遠軽町白滝遺跡群を中心とした旧石器時代遺物、また、秋田県由利本荘市出土の縄文時代遺物は、当該期の典型的な製作技法を看取できる優品が多く、コレクションの客観的な評価を高揚させるものとして理解されるため、各資料の容量計測と器種細分類および観察による属性把握に努め台帳化し、さらに、専門的研究資料への

可能性を模索するため、指触観察と部分的な実体顕微鏡による観察も行い所見に加えている。

このような基礎的整理を通じて思うところは、小松コレクションが当資料館所蔵資料のバリエーションの一角として決して見劣りするコレクションではなく、むしろ既存資料を補完し得るものとして、研究者および一般市民の研究材料として広く公開され、その使命を全うしていただけるよう衷心より願うものである。

今後も整理・調査・研究という過程を経て、さらに価値ある情報を引き出す手段を講じていきたいと考えている。



考古学資料館の収蔵庫内

平成21年度 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧 (*は責任担当者)

平成21年10月1日現在

機関	事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	PD 研究員	研究補助員	外国人研究員	客員教授	共同研究員
A 日本文化研究所	デジタル・ミュージアムの構築と展開	平藤喜久子 星野靖二	* 井上順孝 石井研士 ハイヴズ,ノルマン 黒崎浩行	市川収 フレレ,チャールズ	市田雅崇	李和珍 マシュー,チョジック		ナカイ,ケイト 関守ゲイノー	アイフラ,アンネマリー 江島尚俊 シッケタンツ,エリック 高橋典史 武井順介 フィリス,ドロシア 山田美紀子 松本喜子 小堀馨子 ビュテル,ジャン=ミシェル ガイタニデイス,ヤニス ペルスハイム,ミカ ピナヤク,ロハニ キロス,イグナシオ
	近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究-霊祭・霊社・神葬祭-	* 松本久史 遠藤潤 中野裕三				三ツ松誠 小林威朗		林淳	
B 学術資料館	近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用の研究-柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵巻書資料を中心に-	内川隆志 加瀬直弥 加藤里美	* 小川直之 黒崎浩行		田中秀典	齋藤しおり 新原佑典			
	出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査	内川隆志 加瀬直弥 加藤里美	* 吉田恵二 岡田莊司			藪下詩乃 小西沙和			
	考古学資料館収蔵資料の再整理・修復と公開	内川隆志 深澤太郎	* 吉田恵二 青木豊 谷口康浩	伊藤博司	石井匠				粕谷崇 阿部常樹 姜秉學
	神道資料の整理公開と学術的価値の探求	* 加瀬直弥 森悟朗	笹生衛					山本信吉	
C 校史・学術資産研究センター	國學院大學の学術資産の研究と公開	松本久史 齊藤智朗 加瀬直弥 新井大祐	* 阪本是丸 岡田莊司 千々和到 根岸茂夫 針本正行 松尾葦江 太田直之 藤田大誠	堀越祐一	荒木優也 倉住薫 宮原一郎	笹川勲			
	國學院大學における大学アーカイヴズ体制の構築	齊藤智朗 森悟朗	* 阪本是丸 藤田大誠		宮部香織				
D 研究開発推進センター		松本久史 齊藤智朗 加瀬直弥 中野裕三 中山郁 新井大祐 菅浩二 森悟朗	* 阪本是丸 太田直之 藤田大誠	堀越祐一	星野光樹 宮本誉士				佐藤一伯 津田勉 西高辻信宏 岩橋克二 今泉宜子 ハンゼン,アンニカ
	「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」			康成文		河原亘 重村光輝 冬月律			
	博物館学教育研究情報センター	伊藤慎二	下湯直樹			(リサーチアシスタント) 上西亘 小島有紀子 渡邊真衣			

彙報

※ 伝統文化リサーチセンターの活動については『伝統文化のモノと心』(ニュースレター)をご参照ください。

会議

○全体

- ・平成二十一年度、第二回企画委員会、平成二十一年七月二十二日(水) 十一時～十二時三十分 A M C棟○六会議室
- ・平成二十一年度、第三回企画委員会、平成二十一年九月九日(水) 十一時～十二時三十分 A M C棟○六会議室
- ・平成二十一年度、第四回企画委員会、平成二十一年十一月二十五日(水) 十一時～十二時三十分 A M C棟○六会議室
- ・平成二十二年一月二十七日(水) 十一時～十二時 A M C棟○六会議室

○日本文化研究所

- ・平成二十一年度、第二回日本文化研究所所員会議、平成二十一年七月十五日(水) 十一時～十二時三十分 A M C棟○六会議室
- ・平成二十一年度、第三回日本文化

研究所所員会議、平成二十一年八月二十四日(月) 十六時三十分～十八時三十分 A M C棟○六会議室

- ・平成二十一年度、第四回日本文化研究所所員会議、平成二十一年十一月十八日(水) 十一時～十二時三十分 A M C棟○六会議室
- ・平成二十一年度、第五回日本文化研究所所員会議、平成二十二年一月二十日(水) 十一時～十二時三十分 A M C棟○六会議室

○学術資料館

- ・平成二十一年度、第二回学術資料館会議、平成二十一年七月二十二日(水) 十七時～十七時四十分 A M C棟○六会議室
- ・平成二十一年度、第三回学術資料館会議、平成二十一年十一月十八日(水) 十八時～十九時 A M C棟○六会議室
- ・平成二十一年度、学術資料館資料評価委員会、平成二十一年十一月二十五日(水) 十六時三十分～十七時 A M C棟○六会議室

○校史・学術資産研究センター

- ・平成二十一年度、第一回校史・学術資産研究センター会議、平成二十一年五月二十五日(月) 稟議
- ・平成二十一年度、第二回校史・学術資産研究センター会議、平成二十一年七月二十二日(水) 十四時～十四時五十分 A M C棟○六会議室

・平成二十一年度、第三回校史・学術資産研究センター会議、平成二十一年十二月九日(水) 十三時～十三時三十分 A M C棟○六会議室

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

(平成二十一年六月一日以降)

○全体

- ・第三十五回 日本文化を知る講座「近代日本快人伝―アジアとの架け橋を目指した人びと―」
- ◇第一回 九月二十六日(土) 「海外神社」思想と展開 小笠原省三の軌跡」講師 菅浩二(國學院大學助教)
- ◇第二回 十月三日(土) 「満洲王」の夢 神道家・葦津耕次郎の生涯」講師 西矢貴文(常翔啓光学園高等学校講師)
- ◇第三回 十月十七日(土) 「東洋哲学」の創造 西周・中江兆民・井上円了・梁啓超に於けるカント」講師 ミヒヤエル・ブルチャー(東京大学特任准教授)
- ◇第四回 十月二十四日(土) 「アジア主義」を問い直す R. B. ポースと新宿・中村屋」講師 中島岳志(北海道大学准教授)

各回とも十三時三十分～十五時三十分 百二十周年記念二号館 二一〇四教室

・公開学術講演会

「近代日本の国家形成と学知の意義」講師 山室信一(京都大学人文科学研究所教授)
十月十日(土) 十五時～十七時 A M C棟常磐松ホール

○日本文化研究所

- ・国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」
- 発題者 近藤光博(日本女子大学)、中町信孝(甲南大学)、Jolyon Thomas(米・プリンストン大学)、Jean-Michel Butel(仏・INALCO)、Gregory Watkins(米・スタンフォード大学)
- レスポンド 富澤かな(東京大学)、白杵陽(日本女子大学)、櫻井義秀(北海道大学)、西村明(鹿児島大学)、山中弘(筑波大学)
- 司会 井上順孝(國學院大學)
- 平成二十一年九月二十日(日) 十一時～十七時三十分 A M C棟常磐松ホール
- ・ミニシンポジウム「死と靈魂をめぐる国学者のいとなみ―現実のなかの死生観―」
- 発題者 小林威朗(國學院大學)、中川和明(早稲田大学)、松本久史(國學院大學)
- コメント 三ツ松誠(東京大学)
- 司会 星野光樹(國學院大學)
- 平成二十二年一月二十一日(木) 十四時～十七時二十分 A M C棟○六会議室

・シンポジウム「宗教文化教育に求

められるもの―「宗教文化士」のスタートに向けて―

発題者 木村敏明 (東北大学准教授)、澄田新氏 (関西学院高等部教諭)、多田哲氏 (日本ユニシス株式会社CSR推進部長)、坪田知広氏 (観光庁観光地域振興課地域競争力強化支援室長)、長井恵美氏 (東京大学文学部学生) コメントータ 田中健二 (アジア太平洋フォーラム理事長) 司会 井上順孝 (國學院大學教授) 平成二十二年一月二十四日 (日) 十三時三十分～十七時三十分 若木タワー会議室〇二

出張

・松本久史・三ツ松誠 日本文化研究所 「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究―靈祭・靈社・神葬祭―」プロジェクト調査のため、浜松市立賀茂真淵記念館・掛川市立中央図書館・淡山翁記念報徳図書館・新居関所資料館(静岡)、七月二十七日(月)～三十日(木)

・田中秀典 学術資料館 「近代学術資産のデジタル化・データベータ化による再生活用の研究―柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵葉書資料を中心に―」プロジェクト調査のため、豊橋市図書館・豊橋市美術博物館(愛知)、八月四日(火)～五日(水)

・田中秀典 学術資料館 「近代学術資産のデジタル化・データベータ化による再生活用の研究―柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵葉書資料を中心に―」プロジェクト調査のため、山口県立山口図書館、八月十六日(日)～十九日(水)

・田中秀典 学術資料館 「近代学術資産のデジタル化・データベータ化による再生活用の研究―柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵葉書資料を中心に―」プロジェクト調査のため、名古屋博物館・愛知県図書館・名古屋市政資料館、八月二十四日(月)～二十六日(水)

・内川隆志・新原佑典・朝倉一貴・江戸邦之・田島太良・吉田恵二・加藤里美・藪下詩乃・小西沙和 学術資料館 「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」プロジェクト調査のため、島根県飯石郡飯南町琴引山、九月十四日(月)～二十三日(水)(内川)、十四日～二十四日(木)(新原)、朝倉・江戸・田島、十五日(火)～十七日(木)(吉田)、十五日～二十四日(加藤・藪下)、十八日(金)～二十四日(小西)

・古沢広祐・冬月律・高橋克秀・康成文 研究開発推進センター 「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクトにおける「東アジアの社会経済共存システムに関する研究」の調査・フォーラム参加のため、韓国鎮安郡「日韓市民社会フォーラム2009」参加、郡内視察、十月十四日(水)～十八日(日)(古沢・冬月)、十五日(木)～十八日(高橋・康成文)

・加瀬直弥 学術資料館 「伝統文化リサーチセンター資料館」特別展「まつりのそなえ―御食(あえ)たてまつるもの―」展示資料「賀茂社嘉元年中行事」(重要文化財)等借受立会いのため、賀茂別雷神社(京都)、十月三十日(金)～三十一日(土)

・谷口康浩・中村耕作・石井匠・中島将太・成田美葵子 学術資料館 「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復と公開」プロジェクト調査のため、安中市ふるさと学習館・藤岡歴史館(群馬)、十一月二十日(金)～二十三日(月)

・古沢広祐・重村光輝 研究開発推進センター 「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクトにおける「国内の地域経済共存システムに関する研究」の調査、学会参加のため、鹿児島市内の有機栽培農場調査、鹿児島大学農学部「有機農業学会」参加、十二月十一日(金)～十三日(日)(古沢)、十一日～十四日(月)(重村)

・古沢広祐 研究開発推進センター 「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクトにおける「低炭素社会への共存社会システムに関する研究」の関連会議参加のため、デシマーク コペンハーゲン「気候変動枠組条約、第15回合

日(水)～十八日(日)(古沢・冬月)、十五日(木)～十八日(高橋・康成文)

・加瀬直弥 学術資料館 「伝統文化リサーチセンター資料館」特別展「まつりのそなえ―御食(あえ)たてまつるもの―」展示資料「賀茂社嘉元年中行事」(重要文化財)等借受立会いのため、賀茂別雷神社(京都)、十月三十日(金)～三十一日(土)

・谷口康浩・中村耕作・石井匠・中島将太・成田美葵子 学術資料館 「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復と公開」プロジェクト調査のため、安中市ふるさと学習館・藤岡歴史館(群馬)、十一月二十日(金)～二十三日(月)

・古沢広祐・重村光輝 研究開発推進センター 「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクトにおける「国内の地域経済共存システムに関する研究」の調査、学会参加のため、鹿児島市内の有機栽培農場調査、鹿児島大学農学部「有機農業学会」参加、十二月十一日(金)～十三日(日)(古沢)、十一日～十四日(月)(重村)

・古沢広祐 研究開発推進センター 「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクトにおける「低炭素社会への共存社会システムに関する研究」の関連会議参加のため、デシマーク コペンハーゲン「気候変動枠組条約、第15回合

(COP15) 関連会議参加、十二月十四日(月)～二十一日(月)

・平藤喜久子 日本文化研究所 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト調査のため、厳島神社(広島)・山口神宮(山口)、十二月十七日(木)～十八日(金)

・加瀬直弥 学術資料館 「伝統文化リサーチセンター資料館」特別展「まつりのそなえ―御食(あえ)たてまつるもの―」展示資料「賀茂社嘉元年中行事」(重要文化財)等借受立会いのため、賀茂別雷神社(京都)、十二月十七日(木)～十八日(金)

・星野光樹・宮本誉士 研究開発推進センター 「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」プロジェクト調査のため、山口県文書館、十二月十七日(木)～十九日(土)(星野)、十八日(金)～二十日(日)(宮本)

・重村光輝 研究開発推進センター 「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクトにおける「国内の地域経済共存システムに関する研究」の調査、研究会参加のため、徳島県「上勝町有機農業研究会」例会参加、圃場調査ほか、十二月二十一日(月)～二十三日(水)

・宮原一郎 校史・学術資産研究センター 「國學院大學の学術資産の研究と公開」プロジェクト調査のため、石川県立玉川図書館・福井県立図書館・京都大学附属図書館、十二月二十二日(火)～二十四日(木)

候変動枠組条約、第15回合

資料紹介 二重口縁壺

桜井茶臼山古墳出土(奈良県桜井市外山)

古墳時代前期(3世紀後半) 高さ57cm



国指定史跡桜井茶臼山古墳は、奈良県桜井市外山に所在する全長二〇〇m、後円部径一一〇m、高二四mの前方後円墳である。古墳時代前期の三世紀後半に築造されたもので、堅穴式石室の完存す

る最古例の一つに数えられる。昭和二四年に最初の発掘が行われてから六〇年を経た平成二二年に、橿原考古学研究所の再調査によって墳頂と石室の全容が明らかにされた。

埋葬施設は、岩山を削り出した後円部中央に、長方形の墓壇を掘削し堅穴式石室を造って木棺を納置し、その後石室上部を埋立て方形壇を築き丸太垣を巡らせたものである。石室内部は、水銀朱を全面に塗布した石材によって構築され南北長六・七五m・北端幅一・七二m・高さ一・六mを測る長方体の空間で、基底は南北に続く浅い溝状に造作され、板石を敷き詰め、さらに棺床土を敷いた上に木棺を安置している。

副葬品は、玉杖や玉葉・銅鏃・鉄鏃・鉄剣・鉄刀の武器類や、石製腕飾類のほか、内行花文鏡・方格規矩鏡・三角縁神獸鏡・画文帯神獸鏡・斜縁二神二獸鏡などの銅鏡片多数がある。

従来、この二重口縁壺は、墳頂部に営まれた方形壇を圍繞していたと考えられてきた。しかし、最近の調査成果によると、方形壇の上に並べられていたものが転落したと考えるのが妥当であるという。壺の底部には焼成前から穿たれていた孔があり、そもそも実用器としての機能を具えていないことから壺形埴輪とも呼ばれる。

(内川隆志)